三本木原開拓ミニ年表

▲人工河川稲生川

• 寛政５年(1793年)新渡戸傳花巻に誕生(幼名・縫太) • 嘉永元年(1848年)傳御勘定奉行 • 安政２年(1855年)傳(62歳)藩から三本木原開拓を許可され三本木新田御用掛となり９月人工河川工事に着手 • 安政３年４月鞍出山穴堰(トンネル)2541m、10月陸堰2700m完成。傳再び御勘定奉行に • 安政４年長男十次郎(37歳)新田御用掛になり５月天狗山穴堰1620m完成 • 安政５年４月陸堰4464m完成 • 安政６年５月４日人工河川へ通水成功 • 万延元年(1860年)十次郎十二町四方の都市計画実施、人工河川に橋建設、南部藩主利剛公により「稲生川・稲生町・稲生橋」と命名、防風林植林、産業開発盛んに行う • 文久２年(1862年)十次郎御勘定奉行御元締に(翌年傳の四男・太田時敏新田御用掛) • 慶応元年(1865年)開拓地域で新田検地実施、開田面積は300ha石高は970石(開拓以前の約10倍) • 慶応２年傳自ら墓所を「太素塚」と定める。十次郎の第二次上水計画に着手 • 慶応３年12月十次郎逝去(47歳)盛岡久昌寺に葬る • 明治元年(1868年)十次郎の長男・七郎(25歳)新田御用掛 • 明治２年傳七戸藩家老、大参事 • 明治３年三本木原開拓を国営事業にと願書を民部省へ提出 • 明治４年９月傳逝去(78歳)太素塚に葬る • 明治17年三本木共立開墾会社設立(後に株式会社となり稲生川は太平洋岸まで約39km完成)

• 昭和12年(1937年)三本木原国営開墾事業開始 • 昭和41年国営開墾事業終了(田3376ha、畑5947ha)現在、稲生川総延長は約60kmに至る

現在の十和田市街地▶

新渡戸稲造博士ミニ年表

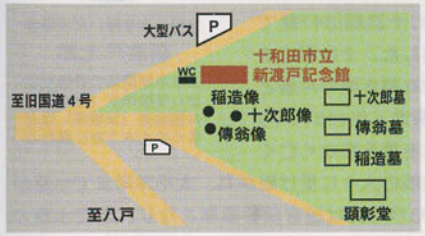
▲幼年時代

• 文久２年(1862年)新渡戸十次郎の三男として、盛岡鷹匠小路下ノ橋の邸に誕生(幼名・稲之助、翌年稲造と改名) • 明治４年(1871年)太田時敏の養子となり上京 • 明治８年東京英語学校入学 • 明治10年札幌農学校入学 • 明治16年東京大学入学(その後アメリカ、ドイツへ留学) • 明治22年長兄七郎の死によりその跡をつぎ新渡戸姓にもどる • 明治24年メリー・エルキントン嬢と結婚、札幌農学校教授 • 明治27年札幌に勤労青少年のための遠友夜学校設立 • 明治32年日本初の農学博士 • 明治33年アメリカで「武士道」出版 • 明治39年法学博士、第一高等学校長就任 • 明治44年初の日米交換教授としてアメリカで講義 • 大正９年(1920年)国際連盟事務局次長就任 • 大正15年(1926年)貴族院議員就任 • 昭和８年８月カナダバンフでの太平洋会議に日本側理事長として出席。10月15日(日本時間の16日)ビクトリアで逝去(71歳)

◀昭和８年(1933年)５月太素塚(十和田市にある祖父傳の墓)での最後の写真

十和田市立新渡戸記念館の成り立ち

十和田市立新渡戸記念館は、大正14年(1925年)に新渡戸稲造博士から三本木文化向上のために贈られた蔵書約１万冊をもとに建てられた「私設新渡戸文庫」を継承し、昭和40年(1965年)創設。一階には稲造の祖父・傳、父・十次郎が中心となって行った三本木原開拓の資料と新渡戸家伝来の武具、兵法資料、二階には稲造博士の遺品、蔵書などを展示しています。

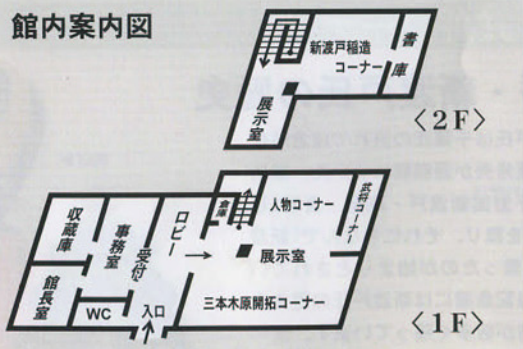


敷地面積／7,722㎡
構　　造／鉄筋コンクリート造
建物面積／364.29㎡
　　1階：258.26㎡
　　2階：106.03㎡
工　　期／昭和39年8月着工
　　昭和40年3月竣工
　　平成3年一部増築

《ご利用案内》

開館時間	９：００～１６：００
休館日	毎週月曜日（祝日は開館） 年末年始（12/29～１/３）
入館料金	大学生・一般　210円（団体178円） 小・中・高校生　52円（団体 42円） 団体は20名以上

館内案内図



十和田市立新渡戸記念館
〒034-0031　青森県十和田市東三番町24番1号
TEL・FAX　０１７６（２３）４４３０
E-mail　nitobemm@hi-net.ne.jp
URL　http://www.towada.or.jp/nitobe/

十和田市商工課
〒034-0093　青森県十和田市西十二番町６番1号
☎ 0176(23)5111 FAX0176(20)1591

(社)十和田市観光協会
〒034-0082　青森県十和田市西二番町4番11号
☎ 0176(24)1111 FAX0176(24)1563

NITOBE MEMORIAL MUSEUM

十和田市立 新渡戸記念館

ようこそ
十和田市立新渡戸記念館へ…

新渡戸記念館では、三本木原の開拓に力をそそいだ新渡戸傳をはじめとする先人の歴史と、国際親善に大きな足跡を残した新渡戸稲造博士の偉業を知る事ができます。

1F 三本木原開拓コーナー

三本木原総合開発に すべてをかけた先人たちの歴史

三本木原開拓の祖
新渡戸 傳翁

人工河川・稲生川の工事

八甲田連峰のすそ野にひらけた三本木原台地。幕末の頃ここに川をつくり、十和田市の基礎を築いたのは南部盛岡藩士新渡戸傳と長男十次郎でした。三本木原台地に奥入瀬川の水を引き、太平洋岸まで全長約39kmの水路を掘るという計画の下、安政２年(1855年)工事に着手しました。途中２ヶ所の穴堰(トンネル)約４kmを掘り抜き11km余りの水路を完成、安政６年(1859年)５月４日三本木原台地への上水に成功しました。川は南部利剛公より「稲生川」と命名され万延元年(1860年)秋には開拓地域ではじめて米45俵の収穫がありました。さらに、上水して６年後の慶応元年(1865年)に行われた新田検地で地域の石高は970石と以前の約10倍になりました。

碁盤の目状の都市計画

上水成功後、十次郎が中心となって十二町四方碁盤の目状の都市計画を行いました。これによってできた町は川と同じく利剛公により「稲生町」と名づけられ、現在もその名が残っています。都市計画と同時に防風林の植林や産業開発もおこない、これらの事業へ融資を募るため万延元年には『三本木平開業之記』を発表し、事業の内容、意義を広く宣伝しました。瀬戸物生産、養蚕、製革などを試み、中でも馬市は町の産業として根づき、後に馬産地として有名になりました。

近代都市計画の先駆者
新渡戸 十次郎
三本木原開拓の他むつ運河の計画など、先見性が光る

▲開拓事務所(会所)で書いていた日誌

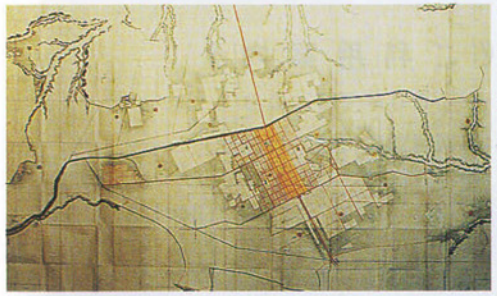
穴堰工具
ばんづる▶

▶測量器具
方位器・勾配器

受け継がれた三本木原開拓

父祖の志を継いだ技術者
新渡戸 七郎
三本木原開拓の経験を生かし安積疏水（福島県）月居隧道（茨城県）など多くの土木工事に携わる

十次郎は稲生川を太平洋岸まで完成させるため第二次上水計画を立てました。この計画ではもう一本水路を掘り合流させることで水量を増やし、太平洋岸まではもちろん多くの支流に水を供給しようと考えていました。しかし工事着手の翌年、慶応３年(1867年)十次郎は47歳で亡くなり計画は中止となりました。十次郎亡き後は、その長男の七郎が遺志を継ぎ傳の片腕として開拓に従事しました。明治４年(1871年)新渡戸傳も太平洋までの通水を見る事なく亡くなりましたが、開拓の志は地域の人々に受け継がれ、太平洋岸まで水路が完成しました。昭和12年(1937年)には国営開墾事業となり、現在水路の総延長は60kmにも及んでいます。そして、稲生川は今も三本木原に豊かな恵みを与えています。



◀慶応元年(1865年)の検地絵図、開拓計画の全体像がわかる

1F 武将コーナー

武将・新渡戸氏の歴史

新渡戸氏は千葉氏の流れで鎌倉時代初め千葉常秀が源頼朝につかえ、軍功をあげ下野国新渡戸・高岡・青谷(現栃木県)を賜り、それにちなんで「新渡戸」と名乗ったのが始まりとされています。当記念館には新渡戸氏の歴史を語る甲冑が数多く残っています。また上杉流の兵法学者・新渡戸維民(傳の父)が残した兵法資料も豊富に所蔵しておりますので、あわせてご覧ください。

馬印▶

新渡戸家伝来の甲冑(室町末)▶
(兜・明珍勝正／鎧・明珍信家)

2F 新渡戸稲造コーナー

国際人・新渡戸稲造博士の業績

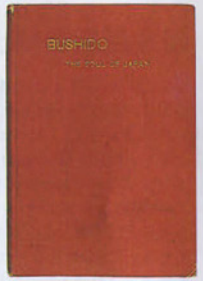
コモンセンス(常識)を教えた教育者

偉大な教育者であり日本の先駆的国際人
新渡戸 稲造
東京帝大入試面接で人生の目標を「太平洋の橋になりたい」と答えたことが有名

新渡戸稲造は傳の孫、十次郎の三男として盛岡に生まれました。札幌農学校を卒業後、アメリカ、ドイツ留学を経て札幌農学校、東京帝大の教授、旧制一高校長などを歴任し教育者として多くの立派な人材を社会に送り出しました。また初の日米交換教授となり、アメリカ六大学で講義を行いました。女子教育にも熱心に取り組み、東京女子大学の初代学長としてその設立に力を尽しています。稲造は一貫して「人格教育」を重視し、教え子たちにコモンセンス(常識)の重要性を教えました。

国際間の使徒として平和に捧げた生涯

大正９年(1920年)国際連盟が結成されると、稲造は事務局次長としてジュネーブに滞在、国際間のかけ橋となり平和のため大きく貢献しました。その後、日米関係が悪化すると太平洋問題調査会の理事長として渡米し各地で講演、両国親善の必要性を説きました。昭和８年(1933年)２月日本はついに国際連盟を脱退、孤立の道を歩み始めました。そこで、稲造は同年８月カナダのバンフで行われた太平洋会議に、平和への最後の望みをつなぎ出席、体調の優れない中で日本側代表としての演説を成功させました。しかし、一ヶ月後病に倒れ、昭和８年10月15日カナダのビクトリアで71歳の生涯を閉じました。



▲「武士道」

◀稲造はジャーナリストとしても活躍し「武士道」をはじめ多くの著書を残した

新渡戸稲造博士は昭和59年(1984年)11月１日発券D5,000円札の肖像画になっています。肖像画は、当記念館収蔵の写真(左)をもとにつくられたので発券と同時にA000001Bの番号の五千円札が日銀総裁より当館へ贈られました。この五千円札は２階稲造コーナーに展示しています。

◀56歳の稲造と万里夫人